

## 幼稚園児における受動喫煙の口腔への影響について

目的：

これまで受動喫煙による健康被害については多くの報告がなされている。なかでも成長発達の途上である小児において、将来に対する影響は計り知れないと考えられる。

さて歯科領域においても、むし歯・歯周病・歯肉着色などの原因となることが知られている。

しかし、幼児期における受動喫煙の口腔内の影響についての報告はみあたらない。

そこで今回、受動喫煙による幼稚園児の、むし歯リスクおよび歯肉着色について調査した。

対象および方法：

幼稚園児 3～6 歳児 85 名を対象として、歯科健診時に、むし歯の状態について診査するとともに、上顎乳前歯部の歯肉着色の状態についても調査した。

歯肉着色は、基準となるチャートを用い同一診査者が判定した。

歯肉着色スコアは、class0 から class3 までの 4 段階に分類した。

そして診査後、幼稚園児に対し「お父さんかお母さん、あるいは おうちにタバコを吸う人はいますか？」と質問し家庭内における受動喫煙の状態について調べた。そして受動喫煙とむし歯の本数および歯肉着色の状態との関についても検討した。

結果：

1. 歯肉の着色は、Class0：67.1%(57名)、Class1：5.9% (5名)、Class2：25.9% (22名)、Class3：1.1% (1名) であり、32.9% (28名) の幼稚園児に着色が認められた。
2. 家庭での喫煙状況は、同居者が非喫煙 56.5% (48名)、同居者のいずれかが喫煙 43.5% (37名) であった。
3. 同居者が喫煙している場合の着色スコアは、Class0: 43.2% (16名)、Class1：5.4% (2名)、Class2：48.6% (18名)、Class3：2.7% (1名) であった。一方、喫煙者がいない場合では、Class0: 85.4% (41名)、Class1：6.3% (3名)、Class2：8.3% (4名)、Class3：0% (0名) であり、両群間には有意の差が認められた。(p<0.001,  $\chi^2$  検定)
4. 同居者に喫煙者がいない幼稚園児のむし歯の本数は  $1.54 \pm 2.56$  歯であり、同居者が喫煙している場合では  $2.05 \pm 3.08$  歯であり、同居者が喫煙している場合では、約 0.5 本むし歯が多かった。しかし統計学上では差はなかった。

考察：

同居者に喫煙者がいない場合、約 15% の幼稚園児にしか歯肉の着色がないのに対し、喫煙者がいると実に 56% も着色が認められた。

また、むし歯との関係は明確ではなかったが、受動喫煙によりリスクが高くなる可能性は十分考えられ、今後の検討課題としたい。

以上の結果から、幼児期においてすでに受動喫煙による影響が口腔に現われていると考えられた。またこの年齢における着色原因の、約半数が受動喫煙による可能性が示唆された。